



# 桃子



深夜の自画像



# 夕焼け

断想70's

# 夕焼け

桃子は、音楽室への階段を駆け上がっていた。二週間前に吹奏楽部の練習に顔を出して、音楽室から綺麗な海が見えたことを発見したのを階段を飛び越しながら思い出している。

\*

音楽室の片隅では

「きょうで一学期の練習は終わりです。期末テストの間に、夏休みの合宿スケジュールを決めておきます。テストが終わったら配ります。よろしくっ！」

と部長のA君が叫んでいた。

「みんな期末テスト頑張ろうぜ！」

と気合を入れていた。

そんな叫びを遠くに聞きながら

「アイツ、何を言ってるのよ。きょうの練習が高校最後の練習だったんだよ、私は……」

と心の中で叫んだあと、思わず

「あっ、ほんとうだ、そうだったんだよ、最後だったんだよ」

と声に出してしまった。



でも、声に出してしまったら、急にセンチが襲ってきて、再び外を眺め続けてしまう。

そんなふうに桃子がセンチな気持ちになっているときも、夕焼けは湾を覆いつくし続けた。海は青色ではなく灰色がかっているのだが、西の空から斜めに差し込む太陽光線のせいで、ところどころ明るく輝いて見えた。そして、大きな湾の中をゆっくりと動いてゆく貨物船が紫色に光っているのは何故なんだろうか、とぼんやりと感じながら、どうして、三年生の今まで毎日部活の練習に来ていたのに、こんな不思議で綺麗な景色に気づけなかったのだろうかしら、と桃子は思った。窓際を離れるのを惜しかったので、桃子はそのまま海を見つめていたのだった。

\*

あれから試験が嵐のようにやって来て、二週間があれよあれよという間に終わっていった。初めて見た夕暮れを、桃子は忘れることができなかった。だから、期末テストも残すところあと一日となった土曜の午後であっても、時間を惜しむことなく、誰も居ないはずの音楽室に行こうと思い立って、今、階段を駆け上がっているのだ。

「土曜日やねえー。試験は月曜日で終わりだよ。だから、ちょっと音楽室でも覗いてくるよ。来週の数学は苦手やけど、何とかなるやろ。きょうまで頑張ったご褒美にちょっと寄り道をして帰ってもええでしょ、ねえママ」

と呟きながら、緊張している自分と早く解放されたい自分が格闘しているのを、他人事のドラマのように捉えながら、試験期間の二週間を過ごしてしまった自分を労わっている。

「イケナイ子だね、ママン」

ぶつぶつとひとりごとを繰り返しながら音楽室への階段を駆けあがってゆく。あの夕焼けをもう一度見てみたいな、と心のどこかで期待をしている自分にも気づいている。

もしかしたら

「誰か、いるかな」

音楽室への廊下のコーナーを猛スピードで回って、飛び跳ねるように走って、そして急ブレーキをかけて止まって音楽室の扉をバンと開けた。スカートがひらりと舞い上がり白い下着がちらりと見える。廊下には誰も居ないから、桃子は平気だ。

「おっと、信太郎君！」

# ピアノ

「なんや、桃ちゃんか。久しぶりやな」

信太郎は、そう言ったあと、再び教室の外を眺めている。

外を見ながら、いったい、何を思っているのだろうか。

と、そんなふうには桃子は思わない。かすかに感じる新太郎への好きという感情も、このときは表に顔を出さず、女子高生の多くが言う「好きでも嫌いでもなく、自分自身でもよくわからん感じかな」という感情だけであった。予想外に教室に人がいたことで、ドキドキしているに過ぎない。

お隣さんのクラスにいて一度も同じになったことが無いのに何故か友達になっちゃったというちょっと気になる友だちだが、ピピピと感じるものがあつたから出会えたわけで、今は好きという気持ちなんかじゃないな、そう漠然と桃子は思っていた。18歳の心とはそのようなものらしい。

当然、試験期間中であつたから、教室には誰も来ない。普通ならそこで二人の会話が始まっても構わないのに、信太郎は桃子の方を一向に振り返ろうとしないのだった。桃子のほうも「そうだ私は夕焼けを見に来たんだ」とひとりごとを言いながら、信太郎とは反対側の窓から夕焼けが山なみを包んでゆくのを眺めている。

\*



普段の土曜なら吹奏楽部の誰かがこの部屋で練習をしている。しかし、試験期間中は例外で、練習には誰も来ていなかった。楽器も仕舞われたままで音を出す生徒は一人もいない。では、何故、信太郎がそこにいたのだろうか、という疑問が生じる。理由があった。

音のない音楽室から静かに海を見ていると、音が溢れているときの記憶が現実を重ねるように蘇えり幻想的な時間が過ごせるのだ、ということを知信太郎は身体で感じて知っていたのだ。

桃子と出会ったのは偶然だったが、桃子が夕焼けを見ながら何て美しい世界なのだろうと感動した二週間前の気持ちと同じようなものを、信太郎はいつか昔にも感じ取っていた。不思議な現象であるのかもしれないが、ここで三年間を過ごす生徒にすれば、多くの子たちが共通に感じきた必然でもあったのだ。

もちろん、そのことは誰も理屈や言葉にはできず、この二人も例外ではなかったので、静けさと夕焼けの余韻がもたらす話を切り出すことはなかった。

\*

「私、この教室からの景色、素敵やなって気がついてん。それで今、来てみてん」

「僕もそうなん。誰もがそう思うてると違うかなー」

「ピアノ。弾くわ。久しぶりやなあ。何がええ？」

「ガーシュイン。頼むわ」

(続く)





# 教室

夕日は、三階の音楽室の中まで差し込んで来ていた。

教室の机の脚の一本一本を長いシルエットにしながら、夕日は壁や床に幾何学模様を映し出している。

桃子が弾いてくれる「ラプソディ・イン・ブルー」に耳を傾けながら信太郎は、ちらりと桃子を見るものの、誰に恥ずかしい訳でもないのに照れのようなものが襲い掛かってきて思わず桃子から目を反らした。

「桃子って変な奴だな」なんて口には出さないけど「試験前に一人でピアノを弾いてやがる」と思いながら、その可愛さにときめいている。

気付いていないのは信太郎自身だけで、純白の芽生えを桃子はピアノを弾きながら感じている。

大人になりきれない信太郎と、少しオマセな桃子。二人の間に無言という愛撫のような時間が纏わりつき、ガーシュンが流れる。

「なあ、何しに来たの、この部屋に」と信太郎が言い出しても、ピアノに集中している桃子にその声は届かない。

「ここから見ると、可愛いじゃないか、オマエ」  
凜とした眼差しや短く切り上げた髪。ニキビが二つほど残っている頬をじっと見つめて、信太郎の呟きは続く。

桃子は気づかないでピアノシュモの箇所を目を細めている。

(続く)

| 2008-05-17 20:56 | 断章70 |

# 海へ

「なあ、いつか夕焼けを見に行きたいな」

と小さい声で言ってみる。

「OKよ、何処へ？」

短い髪をピクピクッと揺らして鍵盤を叩きながら、桃子はそう返事をした。

「ここは少しずつ、そう、poco a poco  
coって書いてあるやろ。そして、フォルテシユモなん」

「海へ」

「そやったら、埠頭がええな。随分と行ってえへんわ」

最後の章で勢いよく鍵盤を叩いて髪を震わせても桃子の髪は乱れなかった。ピアノの音が部屋に響いているのを目と閉じて聴いている。そして余韻が消えてゆくのを確かめてから、桃子は窓のほうへとゆっくり歩いてきた。

\*

刻々と過ぎる時間に押されるように、太陽光線は部屋の奥へ奥へと差し込んでくる。反射した光が部屋じゅうを鮮やかな赤色に染めている。

色白の信太郎の顔が赤く染まっている。遠い山なみのすぐ上に、まるで製鉄所の溶鉱炉から流れ出る鉄のように真っ赤になってまん丸に浮かんだ太陽が窓ガラスを焼き尽くそうとしている。

「真夏の太陽はきっと今ごろ南アフリカ大陸の上空付近にあって、白く燃えるように浮かんでいるに違いないんだ。その光が地球に斜めに突き刺さって、それが厚い空気の層を横切りながら真っ赤に変わるんや。きっとそうや。だから、雲が真っ赤に染まるんや」

(桃子の顔がいつそう赤くなってくる。)

「そして真っ赤な雲は、西の方角から東の空へとまるで松明が燃えるときのように赤々と移動してゆくんや。太陽が沈んでゆくときに光が成層圏で乱反射を起こすから夕焼けは赤いや。波長の短い光は吸い取られてしまって、夕焼けはだんだんと紫色に燃え尽きるように弱まってくるのよ。東の空が赤みを帯びることを反対夕焼けって呼ぶんや。そいつが出始めるころには空全体が薄暗く衰えてしまっていてなあ、海と陸地の境目がはっきりと区別できなくなっているんや」

\*

信太郎は自分に言い聞かせるように話した。その横で同じ窓枠に並んだまま桃子は、その情熱の塊のように語り続ける信太郎の真っ赤に染まった横顔を見つめている。

「それって、ほんとうなん？」

「いいや、僕の想像も入ってるけどな」



偶然、音楽室には誰もいなかった。こいつ、ロマンティックなことを言うこともあるんだな、と

桃子は思いながら

「先輩、私たちって恋人同士みたいやねえ」

「ほうー、なるほどな、それもええなあ」

誰かのカバンが教室の片隅に置きっ放しにしてあるので、そのうち誰かがやってくるかもしれない。だから、二人だけの内緒の会話を交わしているという気持ちはさらさらなかった。

「第一埠頭がええわ。秋になってもう少し涼しくなったら、誘ってくれる？あそこから夕日を見てみたいわ、私...」

「フォルテシュモのところ、もう一回弾いてくれたらOKや」

(続く)

| 2008-06-08 18:38 | 断章70 |

# 夏

夕焼けを、あのあと、ゆっくりと眺めたわけではなかった。桃子がピアノを弾いている間、部屋の中を歩き回ってみたり窓辺から校庭を見下ろしてみたりしながら、信太郎は一向に思い切れない考えにやきもきしていたのだ。

「恋人みたいね、第一埠頭がいいわ」

彼女が何気なく言葉した恋人というマシュマロのような響きが脳裏に大きな余韻を残し、それを消滅させまいとする気持ちが高ぶりながら自然に押し掛かってきたのだろう。いつもの信太郎らしくもなく泣きそうな顔をして俯いて教室を歩き回った。

あの日はそうして泣き顔のまま日が暮れてしまった。学校からの坂道を二人で並んで歩いたことも、決して偶然ではなかったいつもの挨拶のあとのように、何の変哲のないままエキストラの役者たちの演技のように時間とともに流されていった。誰の記録にも残らず、学校界隈の珍しい風景として目立ったわけでもなく、木立の中の坂道を二人が歩いていったという出来事が、そのひと時にありましたというだけだった。

学期末試験が今日で最後だという日の朝も桃子は、いつものように日の出から1時間ほど過ぎて目が覚めた。窓辺のカーテンの隙間を通ってくる陽

射しが枕元まで差し込んで眩しいだけではなく、おでこが焼け爛れてしまいそうなほどに熱くなってしまったからだ。

「そうだ、昨夜は七夕様だったんだな」と突然、桃子は思い出した。とても大事なことを忘れていたことを悔やんでみたが、この日まで持続させてきた期末試験の緊張が1ヶ月ほどの喜怒哀楽を封印してしまったままで、髪の毛が跳ねていることさえも一切気に掛からなくなってしまふほど別人に変貌していたので、このときにはさすがに「まあいいか」程度にざらりと振り返って、やがて七夕のことはすっかり忘れてしまった。

クマゼミが庭で激しく鳴き始めた。

ちょうどそのとき、「朝ごはんの用意ができたよ」と階段の下から桃子を呼ぶ母の声がした。

「桃ちゃん、クマゼミ、きょう初鳴きねえ。梅雨が明けるわ。いよいよ」

七夕の明るる日に気温が30℃をビューンと越える真夏日がやってきて、ポンと梅雨が明けて、桃子の期末試験も終わったのだった。

(続く)

| 2008-07-24 22:03 | 断章70 |



# 夏休み

あれから数日で学校は夏休みに入った。

クラブ活動の練習は毎日続いたので、音楽室へは学期中のように生徒がやってきたが、三年生の顔ぶれは疎らで、桃子も練習に出かけることはなかった。行きたいな、楽器をやりたいなと思っても少し我慢をしなくてはならなかった。そんなとき、「わたしは受験生なんだから」と言い聞かせては家中で一番涼しい空間を探して捻じり鉢巻きで英単語帖や数学公式集に食いついた。

「信太郎君のほうは勉強、はかどっているかな...」と考えることもあったが、桃子は理系で数学物理学科志望だったし、信太郎は文芸学部という桃子にしたらサッパリ意味のわからないところへ進学を希望しているので、競争心も湧いてこなかった。何か共通点を見つけて質問をしてみるなどということ自体も全く頭に浮かばない。受験に関しては全く他所の人だった。

でも、そうなるとうたしたち、離れ離れになってしまうのか...

好きではないにしろ、多感な高校時代のことだからそう感じてもいいはずだが、桃子は根っから楽道家だったのだろう、そういうことさえも思い浮かべることなく、大学生になったら信太郎君と恋人になってしまえたら楽しいかも、などという他愛もない程度のことしか考えていなかった。

\*



このころから異常気象という言葉が流行り始めて、この年の夏休みもとても暑い日が続いた。

信太郎は音楽室の隣に部室を構える美術部員だったので、夏休みのクラブ活動はない。だから、勉強が嫌になったらスケッチブックに絵を描いていれば気が紛れた。勉強が嫌になると、休みに入る前に桃子が貸してくれたレコードをかけながらスケッチブックに向かっていった。

小椋佳の「うす紅色の」「夢は流れて」「少しは私に愛を下さい」などを聴いていると少し大人になったような気分になれるのだが、実際には、高校三年生の割に信太郎はまだまだ幼く相当に純真な子だった。

「桃ちゃん。貸してあげたゲーテ、読んでくれてるかな」とふと思い、手紙を書いてみようと思立った。

この頃は、ハガキが10円、封書が20円だった。

お母さんが使っている居間の抽斗からハガキを1枚貰って、第一埠頭を思い出しながら色鉛筆でスラスラと絵を描いた。そして、ブルーブラックの万年筆で、「もうすぐ夏休みが終わります」と書き添えてポストに入れた。

お盆も過ぎて、あと数日で学校が始まろうとしている。

| 2008-09-10 08:55 | 断章70 |

## ゲーテの文庫(若きウェルテルの悩み)

二学期が始まる数日前、信太郎宛に手紙が届いた。それは桃子からの手紙で、「私の貸したゲーテを読んできましたか」という内容だった。

「まるっきり面白くないし、読書はからっきり苦手で、自分でも文芸学科を迷っていたので」というような返事を書いて封書にしまった。ところが、すぐにそれをポストに入れるつもりが、うっかり忘れている間に新学期になってしまい、学校が始まってからの桃子に渡すことになる。

桃子は手紙にゲーテのこと以外に進路のことも書いていた。

「私は理系に進みますって宣言したんやけど、ほんとうはいろいろと迷うところもあって、芸術学部の文芸学科に進路変更しようかと思っているの。信太郎君は物理が得意やし、男の子で数学が苦手やなんていう弱音は禁物なので、ぜひ、理系に進んで欲しいな。男は数学やん、やっぱし」

信太郎を悩ませたのは、ゲーテがあまりにも詰まらなかったことの言い訳よりも、自分の進学先をコイツのアドバイスで簡単に変更しました、と思われるのが嫌だったことで、手紙の返事には、東京のほうの教育学部を受けることにしたよ、と書いて誤魔化した。

でも、実際に信太郎は、このときに文系から志望変更を決意したのだった。わずか5ヵ月後に入学試験が控えているという時期に思い切った決断だった。

手紙の最後には、「離れ離れになるけど、手紙くれよ」、と書いた。

その手紙は、二学期が始まって二三日過ぎた昼休みに屋上まで桃子を呼び出して渡した。

あの日は学校の帰りにも一緒に帰った。信太郎は夕日の綺麗な道を桃子に教えてもらった。

| 2008-11-07 09:11 | 断章70 |

# 桃子 I

続 断想70's



# 新しい年

新しい年度(昭和51年度)が始まった。東京郊外の東村山市にある寮で信太郎は暮らすことになった。

憧れていた黒いトレンチコートを羽織り、大きなボストンバック一つを下げて、3月末に上京した。高田馬場から久米川までの切符を買っている自分の姿が、今でも鮮やかに脳裏に残っている。大勢の人ゴミの中で1年間を闘い抜くのだという気合がこもっていた。

1時間ほど電車で揺られて久米川駅というところで降り、メモを頼りに寮の住所を探して知らない街を歩いた。東京というところ、実際には東村山市だが、別にそれほど変わった特徴のある街ではなく、ただ広くてざわざわしていて、なんとなく便利そうな印象があっただけで、一緒に上京した高校の同僚であるシュウと日用品を買うために近所を歩き回るものの、都会という威圧感のようなものは不思議にも無かった。

寮の部屋は一人用だった。本来ならば6畳間なのだろう。そこにプレハブの仕切り壁を設けて無理やり一人用に改造したもので、隣部屋のシュウが歩き回る音やひとりごとをブツブツという声が聞こえてくるような粗末なものだった。

3畳の部屋に押入れはない。ベットの形をした上げ床があって、その下が物入れになっている。こいつが部屋の半分ほどを占拠して、万年床とならざるを得なかった。

寮の建物は、木造モルタルで屋根は三角だが、お板蒲鉾のように細長く2階建て構造で、両端にアルミサッシの鍵の掛からない出入口があって、建物を貫く廊下はコンクリートの土間で、それが長くて薄暗い。通路の中ほどの壁際にマッチで添加をするガスコンロが2、3基あり、炊事場とトイレはその通路を向こう側へ通り抜けた所に俄か普請で設けてあった。

部屋にはトイレのような小さな窓があって、開けると中庭が見えた。キャッチボールをするには狭すぎる広さで、草が茫々に生えている。洗濯物ならば干せそうだ。

庭のあちら側には自分たちと同じ構造の建物が見える。後で判るのだが、その棟が近所の病院の看護婦寮で、さらにもうひとつ向こうに、信太郎の居る棟を「西棟」と呼ぶのに対し「東棟」と呼ぶ棟があり、事務所と食堂はそちらにあった。

看護婦寮には、おそらく自分たちと同じ年代の女子が10名ほどいただろう。お向かいさんの子の部屋が見通せたし、窓からは彼女たちのキャンキャンと楽しそうな声もいつも届いてきた。

信太郎たち寮生は、一年後に晴れて希望校の門をくぐることを最大の目標にここに集まっている。女子に興味はあるものの、気に掛けずに過ごすという、ある意味では特別な生活を始めるわけである。

| 2009-04-01 00:00 | 断章70 |

# 夏のこと

夏。

春が終わって夏を迎えようかというころ、期末試験を終えて同寮の仲間たちと駅前の居酒屋に寄って飲んで帰ったことがあった。バイトもしない学生に分際で酒を飲みに店に入るということは、大いなる暴挙であったし、何よりも未成年だった。まあ、時効としてもらおう。

4月から寮生活を始めて3ヶ月近くひたすら勉強に打ち込んできていただけにそろそろ緊張の糸が切れ掛かっていたのだろう。酔うほどに酒を飲むということすら知らない若者だったが、未成年であるという禁止を越えるスリルも些かあったかもしれない。

だが実際には、寮生たちはほとんどが未成年であったにもかかわらず、酒を飲み煙草も吸った。悪いことをしなければ大目に見てもらえるというのがそのころの世間の眼だった。

もともと、飲みすぎて暴れたり悪い遊びをするような者は数少なく、みんな飲み方も知らなければ味もわからなかった。コーヒーを飲むよりちょっとカッコいい飲み物くらいに考えていた子も多く、お金の無いときにまで無理をして飲むこともしなかった。だから、酒を飲むなどという大人の遊びは、小遣いが無ければさほど興味も示さず、貯まったときに興味本位で飲んでみるくらい稀なことだったのだ。



あの夜は幾つかの偶然が立て続けに起こった。教科書のなかに千円札が3枚ほど挟んであったのを見つけた。ウキウキしてたら、同寮のシュウが小銭を持って近づいてきて、酒飲みについてみないかと誘ってきた。期末テストはまずまずの出来かな、と気を良くしていたので誘いに乗って高田馬場駅から早稲田方向にちょっと歩いたところにある店へ行ってみた。楽しいお酒が飲めてゴキゲンな夜だった。

こんなの初めてかもというほど酔っていた信太郎は、シュウに担がれて西武線に乗るのだが、そこでもうひとつ、驚きが起こったのだ。電車が動き始めたときに、ホームのベンチに腰掛けている桃子を発見したのだ。桃子からはときどき手紙が来たし、元気になっていることは知っていたが、まさか東京にいるなんて、どこにも書いてなかったよ。

信太郎の乗る電車は急行だったので、これから30分以上走り続けて行ってしまう。「ええっ」と叫んでもそのあと何もできない。私は驚いたと同時に焦った。桃子が東京にいるんだ…。

「ほんと？嘘じゃない？」

つぶやきとも嘆きとも取れる叫びにシュウは呆然としている。

「でも、間違いなく桃子だった…、うーーん」

この動揺は、一生のうちで1度しか味わえないほどの激震クラスの衝撃だ。どうすればいいんだ、信太郎は。何をすればいいんだ。暗闇のなかに線路沿いの明かりが流れてゆく。どんとんと頭の中が空っぽになってゆく。

| 2009-09-15 19:13 | 断章70 |



# 桃子

頭の中では無限に思考が回り、何故なんだ、どうして桃子は直ぐ手の届き所に居ながら居場所を内緒にしていたのだろうか、と繰り返し繰り返し問い返していた。信じられない気持ちとそれには深い理由があったのではないか、という心配する気持ちが交錯した。

もしや桃子には恋人が居て信太郎には黙っているのではないか、とか、いや偶然にホームに居ただけでどこか別のところに住んでいるのかもしれない、などとあらゆる状況を信太郎は想像した。そして、或る段階ではっと気が付く。

あの子は今何処で暮らしているのかということを手紙でも電話でも一度も触れたことが無かったじゃないか。念願の文芸学部に入れたので幸せだ、がんばるぞ、という文面は何度も何度も綴っているものの、それ以上詳しいことには何ひとつ触れずにいたではないか。あなたはもう少し勉強をして、新しい目標を目指してね、と渴を入れる手紙や、目標を達成したら再び並んで目標を目指そうね、という言葉をきちんと信太郎に届けたものの、住まいのことは知らせてはくれなかった。

桃子の言葉に嘘が無いとすると、あいつは都心の学部の学生なのだ。じゃあ、何故、二人が会えるほどの距離に居ることを隠しているのだろうか。

時間が止まったように打ち手の無いままで無限ループを彷徨っている。記憶力も働かない状態で自販機でビールを買った。そして、寮の廊下でシュウと分かれて部屋に戻ってから、ビールを一気に飲みほした。

天井を見つめて考え、また、眼を閉じてまた悩んでみる。やはり手段は、すぐに桃子に手紙を書くしかないのだ。

| 2009-11-06 20:56 | 断章70 |

## 桃子 2

朝メシの時間に信太郎の部屋のドアを叩いて、シュウがいう。

「こら、起きんか！屈辱の日を忘れたのか」

さすがにこの言葉は槍よりも鋭く突き刺さる。忘れもしない、3月31日のことを思い出させてくれる。

あの通知には、オマエは我が大学の試験において合格ラインに達しているため入学を認めてやろう、という内容が書いてあった。そりゃあ、行きたいわ、だから三日間ほどオリエンテーションなどに通ったけど、授業料を払う前にムカついてやめちまった。

寮のオバチャンも「三日中退」を引き留めた。しかし、寮の連中と一緒に信太郎は次のステージを目指すことに目標を移していた。

「補欠はいやや。正式にはいったる」

そういつて、三日間だけ幻の大学生を送りつつあったのを拒否し授業料払い込みをやめて、こうして予備校生をしている。何が都の西北だ。オレは新しい道を探すわ。教育学部はもはや目標とちゃうわ、と狂気のように叫びながらも、一方でシュウに肩を叩かれもう1年一緒に頑張ろうと宥められて今の寮に引き留まったのではなかったか。

もう、忘れかけていたのに、シュウの奴はオレの弱みを攻めてくる。

「そうや、女の子にウツツを抜かしている間などないんや、さあ、試験も終わったし、次の勉強しようか」

なんて悲しい話だろうと大人なら思うところだろう。しかし、受験生はそれでよかった。桃子のことは気に掛かったはずだが、もうひとつの目標があった信太郎には、日一日と桃子のことを気持ちの中から消し去ることは難しくなかった。

ほんとうに信じられない話だが、一夜眠ってしまっ、受験参考書を目の前にしたときには、早々に切り替えている自分がいたのだった。

| 2009-11-07 22:06 | 断章70 |



## 桃子 3

数日後、朝メシの食卓でシュウが突然、信太郎のほうを向き直って「オマエ、桃子からの手紙の消印を確認したん？消印で居所がわかるやん」

と、突然大声で言う。

不意を突かれた形で、信太郎はぐっと黙ってしまう。

--- そうや、何で気がつかなかったんやろう

と頭のなかを稲妻のようなものが走ったあと、目の前がすーっと真っ白になってゆく。驚きが一息ついて少し冷静さが戻ってきて初めて、どうしてそのことに今まで気が付かなかったのだろう、という後悔の念が襲ってきた。

まさか、桃子が東京に住んでいるはずがない、それになぜ、手紙にはそのことを書いてよこさなかったのか。不思議だった。頭の中をこの疑問が何度も巡ったあの晩に、どうして手紙の消印を確かめようとしなかったのだろうか。

自分の思考が桃子の秘密を素直に受け入れてしまっているのは、確かに自分のお人好しでもあるのだろう。だが、それにはささやかだが理由もあった。それは、桃子が都心に住んでいることが紛れもない事実である以上、何処に住んでいてもそれほど慌てることもない、というような落ち着きのようなもので、もはや、探してもそう簡単には見つかるまいという、

妙に冷めた感覚でもあった。それよりも桃子には何か信太郎に言えない深いわけがあるんだ。

--- 桃子、何を考えているの。何を隠しているの。深い訳を話しておくれ。

桃子はそう簡単に会ってはくれまい。その深い理由はわからないことかもしれない。だから彼が何かを提案しても居場所を教えてくれないだろう。彼は簡単にそう結論付けていた。でもでもでも、近くにいるのは間違いないのだから、と思うたびに胸が張り裂けるほど高鳴った。頭のなかで、最後にホームで見かけた姿がぐるぐる廻っている。朝メシの箸は止まったままだ。

そこで、また、シュウが

「オマエ、桃子を探さんのか、一緒に行つたるで」

と、静かに言う。ニコニコしている。からかっているみたいだが、奴は真剣だった。

| 2009-11-13 19:05 | 断章70 |

# 絵

信太郎の部屋には一枚の絵が掛けてあった。卒業記念に桃子がくれた絵だ。絵に馴染みのない信太郎には、その上手さも芸術性もわからなかったが、じっと見ていると何かが見えてきそうな気がした。かなり大きな絵に思える。100号っていうのかな。

桃子が美術室で石像を睨んで描いていたときに傍にいて黙って後姿を見ていた日があったのを思い出す。そのままにしててな、といいながら彼を見つめてクロッキーをしていたこともあった。休日になるとあの子は、スケッチブックを持って街へと出掛けていたのだろうか。もらった絵はそんなに簡単に描けるものではないだろう。これを描くのにどれほどの時間を費やしたのだろうか。

その絵には人のいない入組んだ路地と遠くに家が描かれている。黄色い家が石段の上のほうにあって、そこから狭くてくねくねと曲がった石段とコンクリート塀の続く一本の道が描かれている。

文芸学部へ行くと話してくれたのだが、絵と書道も続けるつもりだとも教えてくれた。この絵は3年の秋に出来上がった作品だと教えてくれた。季節は夏。夏の色合いはあまり感じさせていないけど。

--- なあ、桃子。おまえさんの中で何が起こっているんだい。僕に下宿を知らせないなんて。

そう絵に向かって信太郎は呟いてしまった。



さて、あてもなく彷徨っても仕方あるまい。彼にできることといえ  
ば、もう一回手紙を読み直して、そこに秘められた手掛かりを探ることく  
らいだろうか。あとは、偶然に駅で出会うのを待つしかない。手紙で居場  
所を聞いても間違いなく教えてくれはしまい。

シュウと街に出掛けて探すといっても何の根拠もない。微かな希望を  
持って駅前を次々と散歩するのか、と考える。そう、信太郎は、すっかり  
暗い人間になってしまっている。それと比べてシュウは明るく楽天的で、  
しかしながら繊細で闘争心があって強いなあ。

隣の部屋からシュウの寝言が聞こえるときがある。弱音なんてことは  
絶対にない。闘志を吼えるような英語の寝言だ。性格が全然違うから、一  
緒について行けないところもある。

「おまえ、桃子と手、つないだ？」  
大きな眼で信太郎を見つめて遠慮なくズバズバと何でも話しかけてくる。  
やさしい眼が輝いている。

| 2009-11-16 12:00 | 断章70 |



## シュウ

寮の廊下にはマッチで点火をするガスコンロが並べてある。シュウはそれで湯を沸かしてお茶を入れてから、その湯飲みを手にノックもしないで信太郎の部屋に入ってきた。そしていきなりその質問。ちょっと、答えに困ってしまう。

--- そんなんじゃないんだけどな、オレたち。

そんなことを説明しても、シュウにはわからない。男と女は突っ走ってしまうものだとシュウは決めて掛かっているし、実際にシュウは背が高く男前でブルジョアでケチじゃなくて、凄くよくモテル。オマエとオレは全然違う思想の持ち主なんだよ、と説明しても受け付けない。

湯飲みを啜りながら信太郎は

「オレは探さないつもりにはしているんだ、正攻法の手紙で尋ねるわ」と素直な気持ちをシュウに伝えた。

高校時代から寮暮らしの経験があって共同生活の大先輩でもある。寮に来てまもなくのころ、住まいの必需品の買出しに一緒に出掛けてくれたし、お揃いで寿司屋風のごっつい湯飲み茶碗を買ってくれた。シュウは、コンプレックスのこともエロイ話も何でも相談に乗ってくれるいいヤツだ。

「桃ちゃんは、オレが探し出す。見つけたら教えてろ。そのときはオレの彼女にしてええか？」

信太郎は慌てて

「おいおい、ジョーダンはそこまでにしてくれよ。オマエが見つけてもオレのもんや」

と言り返す。

「あほやな、本気にするか。オレは面食いやから心配いらんわ」

シュウとの会話は、そんな調子で弾み、やがて萎んでいったのだが、桃子の住まいのことは気に掛かったままだった。

この時代は公衆電話であろうともその辺の至るところにあったわけでもない。病院や駅前、大きな店などまで行かねばならなかった。コンビニなどというものはそれ自体が世の中に存在しなかった。だから赤電話がある近所のタバコ屋まで、ポケットに溢れるほどの十円玉を持って出かけることになる。誰もそんな状態で遠距離に電話を掛けようとするようなヤツはいなかった。そんな時代である。

そう、だから、桃子の連絡先の電話番号などどこにもない。卒業名簿にはあるだろうが実家だ。やっぱし、万事休すだったのだ。

そう考えると、手紙ってのは現代と比べると猛烈にスローな文化だったことになる。

| 2009-11-17 12:00 | 断章70 |

# 桃子からの手紙

夏が終わって、新学期が始まったころのことだった。桃子は信太郎あてに手紙を書いている。夏休みに入る直前、8月初旬に受取った手紙への返事であった。

7月下旬の或る日、高田馬場駅のホームで桃子を目撃した事件で、信太郎は桃子に手紙を書いていた。事件から一週間ほど後のことだ。その手紙は桃子の実家にむけて出され、これを受取った家族が「手紙が来ている」と桃子に伝えたのはお盆の直前のことであった。

どうして桃子の家族が半月ほども手紙を放置していたのかには理由があった。受験の追い込みを迎えていたこの年の1月に、桃子の父は女性問題が原因で家を出ていた。事実上離婚状態で、母は桃子を大学に入学させたあと、長野県の実家に引きこもってしまっていた。つまり、実家の面倒を見るの者がいなくなっていたのだった。

手紙は実家の近所に住む兄が発見して、母を経由して東京まで届いた。

桃子の住まいは西武池袋線の江古田駅から徒歩15分ほどの閑静な住宅街にあった。音楽大学もあって、広くてどっしりと落ち着いた下宿屋が多く、毎朝ピアノ練習や発声で眼が覚める。ちょっと風変わりな下宿だった。



届いた手紙では、夏休み前から手紙が途切れてしまったことの原因を簡単に書いて、そのあとにどうして自分が江古田にいて、どうして文芸学科にいるのかを説明していた。

前略信太郎君。

あまりの久し振りなので、万年筆のインクが掠れそうです。

いけないわ、これからはもっとせっせと書かねば。

それよりも、大事なお知らせ。

私、江古田にいるのよ。

そんな書き出しだった。

| 2009-12-09 21:56 | 断章70 |



## 続・桃子からの手紙

(手紙、続く)

三月に合格通知が来て東京の大学に来ることになりました。いつか、学校帰りに進学の話をしながらかみまで歩いたことがあったでしょ。あとのときに、芸術大学の文芸学科っていったい何をするのだろうって話していたね。私もよく知らないまま来てしまいました。でも、文芸一般をやって絵も描けたらいいなあと思っています。

下宿は江古田というところですが、町名にはそんな名前は全然ありません。目印もないわ。西武池袋線に江古田駅というのがあって、そう呼ぶと通じます。私の大学と音楽大学ともうひとつ大学があって、駅前周辺には学生が大勢います。

音楽大学の校舎の塀沿いにある静かな住宅街の一角に下宿はあります。私の下の階の人たちも女性ばかりで、ピアノが置いてあって朝の8時になると決まって発声練習をするから目覚まし時計が要らないくらいです。でも、それはちっとも騒音じゃないの。オルゴールの目覚ましとか協会の鐘がなるのに似てるかな。そういえば、近所に教会があって日曜日には鐘が聞こえたかもしれないな。

| 2009-12-16 06:46 | 断章70 |

## 続(2)・桃子からの手紙

(手紙、続く)

手紙が纏まらなくてごめんね。

実はね、家庭のなかでいろいろありました。受験前の両親のトラブルは正直言っただけに染みたけど私だって飛び立たなくっちゃならないからって思ってね。こういう苦境のときって、本当の友だちには心を開けて相談できないものなんだってことも知ったわ。信太郎君にはあとで話そうとか思わなかった。

手紙が来てもしばらく返事を御座なりにして、これじゃあいけないと思いつつも、ここだって言うときに連絡を入れて驚かせてやろうとも思っていたけど、先に高田馬場に居る私が見つかってしまったから仕方がないか。

大学生活は順調です。

信太郎君は早稲田と相性が合わなかったんだっていう噂も聞いたわ。浪人っていう柄じゃないのに。絶対に来年は落ちぶれてオシマイよ。私の想像ですけど。

でも、人間はそんなことでは決まらないの。そう思う。

私ね、お父さんに女の人ができることで家庭がもめてしまったあとに、そうちょうど受験の真っ最中だったけど、家を出て母の実家で母と一緒に暮らし始めたの。まあ、二三ヶ月のことだったけどね。

今の学部に来る決心をしたからなのか、家が嫌なので飛び出した結果が今の学部なのか。その辺のところは運命が決めることかも。

| 2010-02-06 08:22 | 断章70 |



# 手紙のあと

信太郎はその手紙を手にし、エアーメール用の薄く半透明の便箋に書かれている滲んだ文字を見つめながら、あした街に出かけたらブルーブラックのインクを買ってこようと思った。今は黒色と青色の二本のインクを使っているけれど、自分もブルーブラックで手紙を書くことにしようと思っかけていた。

その色は少し大人の雰囲気漂わせる色だった。鮮やかでも美しくもない。少し濁っているようでありながら、落ち着きのある雰囲気を伝えてくる色であった。

「運命が決める」のか。

桃子がくれた手紙に使われている運命という言葉、信太郎はそれほど重苦しいものとは考えてはいなかったものの、この子が直面している苦悩に満ちた悲鳴をしっかりと受け取ったし、共有したような感触であった。桃子は大学生として新しいスタートを切っている一方で自分は横着にも名門を蹴飛ばして浪人を選択した愚か者なのかもしれない。そう思いながらも、自分の幸運は自分の力で開拓してゆけるものなのだという強い確信を信太郎は心の中にしっかりと持っていた。朝夕呪文のように唱える英単語などは日々絶好調であったから、不安はどこにもなかった。

ただ、読み終わった手紙を机の上にひょいと投げ出して大きな溜め息を吐

いたあと、途轍もなく桃子に会いたいと思うのだった。恋でもない。愛でもない。いったいなんだったのだろう。

進学先を決めるころ、暑い教室の窓から暮れてゆく夕やけを並んで見ていた日から数えておよそ1年程が過ぎる。その間に自分たちの間にさまざまな変化が起こったのだと認めながら、底流にあるこの子を想う気持ちはあのときから変わっていない。でも、その正体とは何なのだろう。

部屋には電話などない。会うということの重さを感じつつ、じっと手紙を見つめ続けた。

| 2010-04-27 12:40 | 断章70 |

# 桃子 II

— 断想70's



## II その1

幾日も手紙と睨み合うときが続いて、その間にも何度か返事を書こうと信太郎は試みた。しかしそうすればするほど、部屋は静まり返って行くばかりだった。便箋を丸めては屑籠に放り込むことを繰り返し苛立ちながらときには少し焦りまた気まぐれに余韻を楽しむような日々を繰り返している間に夏が終わっていった。

受験生活も2年目に入り精神的には大人の部分を持ちながら中途半端に子どものままの自分がいることを認めている。実際には大人ぶっているひとりの自分がいて、その大方が虚勢であり真の姿は未熟なままなのだ知っている。早く合格して大見得を切ってやいたい。自分を笑った者たちの前を素知らぬふりをしながらも堂々と歩いてやりたい。それは誰のためでもなく自分のためでありひとつの目標だった。入学できた後など何も考えていなかった。今は英語の単語、数学の難問をひとつクリアすることが自分に課せられた運命だと固く信じていた。受験というものに夢中な日々を過ごしていた夏があったのだ。

勉強ばかりに明け暮れているのだが、決して馬鹿みたいに下宿に缶詰にはならなかった。近所のケヤキ道へジョギングに出かけたり、その沿線にある空きグラウンドでキャッチボールもした。朝まで机に向かっているも、気分転換のために早朝の緑のなかへ飛び出して爆発もした。そのあと下宿に戻って飯を食って眠る。そんな日は学校を自主休講とした。

しかし、そんなことをしている間にもときどきは桃子のことを思い出したりもした。この下宿からすぐのところに住んでいながら、桃子には商店街で出会うことも無かった。会わないほうが不思議なのに何故会わないのだろうか、と考えたりしながらも、仕方がないなと諦めて終わってゆく。受験のことに頭が還ってゆくのがだった。

そもそも会わないことがおかしくないか、と信太郎は考えなかった。その辺が少しのんびり屋なのかもしれない。そのころ実は、桃子のほうは何度も何度も信太郎を目撃していたのだ。駅前のスーパーでもその隣の化粧品屋さんでも、駅のホームでも桃子は信太郎とニアミスをしていた。信太郎君、私の顔忘れたのかしら、と思うほど信太郎が鈍感だったと、桃子はそのときに感じている。

確かに桃子は随分と大人びてしまった。だが、信太郎も大人になって昔の桃子のような女性に目が止まらなかったのかも知れない。桃子も信太郎も双方に関心や情熱が欠落したわけではなく、そこにはひとつの必然があり、時代の始まりを迎えたように二人はニアミスの先にあるもう一步の引力を消失しかけていたのかも知れない。

ねえ、神様、あの日の夜に桃子と信太郎がすれ違ったホームのような衝撃的な出会いはもう来ないのでしょうか。

人生はドラマではない。そんな気の利いた物語など何も無い……というのが普通の物語だろう。桃子と信太郎もそんな風に夏を過ごし秋を迎える。

信太郎はいつそう浪人生らしく、そして桃子は垢抜けした大学生へと変化してゆく。同じ江古田という街で、大声で叫べば声が届きそうなとこ

ろに住みながら、別世界の住人同志のように厚い壁に隔てられたかのように二人は暮らしている。



## II その2

信太郎は夢を見ない子だった。ぐっすり眠ってしまう質だったのだから。だから桃子の夢を見ることも滅多になかった。

夕焼けを並んで見た美術室のカーテンや汚れた窓枠は何の変哲もないものであったけれど、ねえねえこっちへおいでよ、と桃子が呼び寄せてくれた教室の反対側からの景色はまるで夢のように感動的だった。真っ赤という色に人生で初めて出会ったとあっていい。それまで自分が持っていた日暮れの美しさの印象を正反対に捻じ曲げてしまったのだから。

沈んでゆく太陽が焦げ付くような光を放ち、海に浮かぶ大型船を赤く染めている。それは生き物の心臓を抉り取って血が弾け跳んでいる赤さに似ている。その赤は緩やかに揺れるように波打つ。その規則的な鼓動のエネルギーは、真っ赤から次第にオレンジ色に移り変わり、やがて生き物に見えたのが嘘のように静かになり、輝く鉱石が化学反応で爆発するような瞬きの果てに、燃え尽きて海の色に吞まれてゆくのだった。

光に魔術があって、自然には魔力があって、自分たちの心にはそれを受け入れるゲートがある。真っ赤な夕焼けは言葉ではない呪いのようなもので、二人を纏うあらゆるものの動きを停止させていた。

夏が過ぎてゆくのを誰もが惜しみつつも、秋が来ることを歡んでいる。あのあと、桃子は1年後の自分を予知し、信太郎はその予知を逃し

た。だが、何もかも忘れて受験勉強に夢中になっていた信太郎には、さほど大きな問題でも話題でもなく時間が経った。

\*

突然。そう突然という言葉はこういうときのためにあるのように、ある日ひとつの出来事が起こった。あの日も普通に一日が始まり、そして終わってゆこうとしていた。

高田馬場から西武新宿線で久米川に向かう。寮に帰ったらまず風呂屋に行こうか飯屋に行こうかなどと他愛ないことを考えながら窓の外を流れる景色を見ていた。そして、何を思ったのか、体がムズムズしたのか、ひよんなことで小平駅で降りて寮まで歩こうと思い立ち、ドアが閉まる間に小平駅のホームに飛び降りた。

ところが、階段の上り口あたりが混雑しているのに信太郎は気が付く。いったい何事なんだろうか、何か事故でもあったかなと思いながら人の群れについて階段を上るとそこには真っ赤な夕焼けが武蔵の山に沈んでゆくのが見えた。

そうだ、桃子はいつかの手紙で自分の部屋から真っ赤な夕日が富士山の向こうに沈むのが見えると書いていたなあ。桃子もこの同じ夕日を見ているかもしれない。そう思うと、桃子に会いたいなと思う。でも、逢える期待もさほどなく、探す元気もない。浮いたり沈んだりの気分で小平霊園の散歩道を歩いていると、シュウが駆け寄ってきて「おい、高田馬場で桃子に逢うたで」という。「桃子は江古田におるんやって」

信太郎は、駆け出していた。やっぱし桃子を探そう……。そう心に決めていた。